



今年の教区の目標
 黙想の家・若者たちを
 教会の宝に

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
 カトリック那覇教区本部
 TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
 発行人 押川 壽夫司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2017年2月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第699号 (2月号)

祝 キリシタン大名 ユスト高山右近の列福!

今年、日本のカトリック教会にとり、大きなよろこびの中に祝う典礼・祝賀行事は、キリシタン大名・ユスト高山右近の列福式です。日本の教会が長い間、念願して待ち望んでいた列福式は、来たる二月七日、大阪城ホールで教皇代理、ヴァチカンの列聖省長官 アンジェロ・アマート枢機卿の列席の下に執り行われます。

高山右近は遠い四〇〇年の昔の、人びとの記憶の外にある人ではなく、今や列福されて身近な存在となりました。

那覇教区長 ベラルド 押川 壽夫司教



を選んで追放される。

- ・一六一四年、江戸幕府が《切支丹禁令》を發布。右近一家は金沢を出て大阪から船で長崎へ。長崎からジャンク船でマニラへ。マニラでは大歓迎を受ける。
- ・一六一五年、マニラ到着後四〇日ほどで

全国の教会で、また皆さんが個人的に行ってこられた《右近と歩む祈りの旅》から、キリシタン大名・ユスト高山右近列福式の意義と信仰のかがみであるその生涯について思い起こしてみましよう。

熱病にかかり、二月三日死去。享年六十三歳の生涯を閉じる。マニラ市により盛大な葬儀が行われ、イエズス会聖堂に葬られた。

◇右近の略歴

・一五五三年(天文二二年) 摂津国三島郡清溪村高山(現在の大阪府豊能郡豊野町)に生まれる。

・一五六三年、父高山飛騨守と母と共に、家臣一五〇人が洗礼を受ける。

・一五八七年、秀吉の《伴天連追放令》により、信仰を守ることと引き換えに、領土と財産をすべて捨てること

◇殉教者の先駆け

日本の教会は宣教を始めたときから、殉教者とはどのような信仰を持って生きていく人かをしっかりと教えてきました。

信仰者はキリストと同じように「神へのご大切「愛」の為に、自分のすべてを捧げ尽くすこと、それが《殉教者》です。しかも、《丸血留「マルチル」》は、血を流すことだけではなく、自分のポ

教区の日 記念ミサ・祝賀会へのご案内



高山右近列福記念・司祭叙階60周年・50周年 修道誓願50周年・結婚50周年

平和と善

今年は「教区の日」と特に「高山右近の列福式」を祝い、また、節目を迎える方々のために感謝ミサを捧げ、祝賀会を行います。大きな喜びのうちに、祈り、祝福し、教区誕生の日を祝いましょう。

カトリック那覇教区長
 ベラルド押川壽夫司教

- 日 時 2017年2月11日(土) 午後2時
- 場 所 カトリック安里教会

- ◇司祭叙階60周年 ラサール・パーソンズ神父 (カプチン会)
- ◇司祭叙階50周年 ベラルド 押川壽夫司教 (那覇教区長)
- ◇修道誓願50周年 Sr. ラファエラ 比嘉政子 (聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会)
- ◇結婚50周年(金婚式) 座喜味五一・幸子ご夫妻 (名護教会)
- 石垣陽一郎・郁子ご夫妻 (首里教会) 大城 庸秀・文子ご夫妻 (コザ教会)
- 砂川 正夫・正子ご夫妻 (安里教会) 新里耕太郎・トミ子ご夫妻 (安里教会)
- 平山 良武・初子ご夫妻 (開南教会) (他に、各小教区で該当するご夫妻)

ロシモ(隣人)を大事にし、仕えることによって、神への《大切》は証しされます。さらに、流罪中にいのちを落とす者、牢獄の辛い境遇に耐え抜いていのちを落とす者、そのほか、どこにおいても信仰のために疲労困憊の末、道中で命を落とす者、これみな丸血留です(切支丹時代に書かれた《まるちりおの心得》より)。つまり、信仰のために追放され、その旅先で死ぬこと、これも殉教だと日本の教会は教えたのです。

高山右近は《追放という殉教》の先がけとなりました。

秀吉による右近と宣教師たちの追放事件は、ローマ教皇に伝えられ、時の教皇シスト五世は、右近に宛てた特別書簡の中で、追放という境遇をひたすら生きている右近を殉教者と認め、心からの敬意と祝福を送っています。

また、右近の追悼文を認めたフィリピンのイエズス会管区長バレリオ・デ・レデスマは、右近の人生を次のように結んでいます。

「右近は、わたし達が知っているような血と死を通して信仰を証しする殉教者ではありませんでした。しかし、彼が担ってきた大変な苦勞とその奉獻は信仰によるものでした。右近の人生は長い殉教生活でした」(二六一五年フィリピン年報)。

◇復活の神秘を生きた右近

信仰を守るために高貴な身分を捨て、自由を奪われ、貧困とへりくだりの生活に徹して勇気と忍耐の衰えも見せずに、十字架のイエスの道行き同然に最後の日まで変わらぬ信仰を持ち続けた右近は復活の神秘を生きました。その堅固な信仰からくる右近のことばは、今を生きるわたしたちを励まします。

一五八七年七月二四日、秀吉が発した切支丹追放令による厳しい迫害の最中、どのような境遇に置かれても右近の信仰はゆるぐことはありませんでした。

「わたしは太閤様を侮辱したとなど一度もありません。高槻や明石の家臣や領民を信者にしたのは、けっして悪いことではなく、むしろわたしにとっては手柄です。キリスト教を捨てよ、ということに関しては、たとえ全世界を与えるからと言われても、真の救いと引き換えにはできません。わたしの身柄や封禄や領地のことは、太閤様の思う通りになさってください」(ルイス・フロイス『日本史』第二部九八章)。

「これからわたしの行くところに、神がおられないところなど一つとしてありません。神が共にいらっしゃるかぎり、どこにいっ

ても故郷に帰るような思いです」(二五八九年二月二十四日付『一五八八年度日本報告書』)。

◇祈りの旅へのおすすめ

一九六五年、日本の教会は信徒発見一〇〇周年を迎えた時、高山右近没後三五〇年を共に記念し、右近の列福運動を再開しました。今年、長年にわたるこのわたしたちの念願が叶えられて、ユスト高山右近は福者の列に加えられます。

高山右近が身近な福者となりました。四〇〇年前、切支丹迫害時代に生きたクリシタン大名・ユスト高山右近の列福式を迎えた今、それが現代のわたしたちにどのような意義があるのでしょうか。

それに答える為に日本カトリック司教協議会、列聖推進委員会が発行した冊子「右近と歩む祈りの旅」―ユスト高山右近の列聖に向けて八日間の黙想―を発行しました。これを是非手にとってみてください。そして個人的にもまた教会での祈りの集いやその他のグループで、もう一度祈りと黙想を繰り返すことをお勧めいたします。

福者となる高山右近がさらに身近な信仰の友となるでしょう。

奄美で司祭叙階50周年を祝う

去る1月8日、奄美市にある古田町マリア教会において、押川司教の司祭叙階50周年の記念ミサが執り行われた。同教会は、押川司教が、司祭叙階直後から、5年間に渡って助任司祭として務められた場所で「ここが私の司祭職の原点となりました」と、司教も説教の中で言及されておられた。

1967年12月21日にローマで司祭に叙階された押川司教は、司祭叙階30周年に当たる1997年5月25日に那覇教区長として司教に叙階された。今年は司教叙階20周年でもある。

マリア教会には、押川司教の出身教会である大熊教会や主任司祭として務めた奄美の各所の教会から沢山の司祭、修道者、信徒が参列し、沖縄からも2人の司祭と3名のシスター、13名の信徒が参列した。ミサの後、場所を奄美観光ホテルに移して祝賀会が開かれた。各小教区が用意した歌や踊りを楽しみながら用意されたご馳走に舌鼓を打った。



沖縄から参加したみなさん

押川司教からは50周年の記念カードとロザリオが用意され、参列者に司教が直接手渡して感謝を述べられていた。那覇教区でも、教区の日2月11日に、毎年記念日に当たる人々へのお祝いとともに、司教様の50周年をお祝いするため準備が進められている。沢山の参列をお願いするとともに、教区長として多忙な日々を送られる押川司教のため、たくさんのお祈りで支えていきましょう。

A MAN WHO WALKED THE PATH OF OBEDIENCE JUSTO TAKAYAMA UKON (1552-1615)

(Excerpt from CBCJ leaflet released for promoting the canonization)

February 7, 2017 marks another milestone in the history of the Catholic Church especially of Japan as Takayama Ukon beatified as Martyr of faith. But who is Takayama Ukon? Why is his beatification very timely to this century?



The famous Christian feudal lord Justo Takayama Ukon (1552-1615) laid the foundation on which the Church described above was solidly built. Ukon is known as a typical feudal lord active in the middle of the 16th century, during the latter part of Japan's century of civil wars. Ukon met up with Jesuit missionaries and was baptized at the age of 12

along with his father Dario. Ukon was an active and trusted vassal of Oda Nobunaga(1534-1582), who finally subdued the long drawn out civil wars, as well as of Hideyoshi, Nobunaga's successor. These two Shoguns made major moves toward concentrating their own personal control over the whole of Japan. However, although Hideyoshi had previously shown understanding toward the Church, in 1587 he suddenly did an about face in his religious policy. Ordering the deportation of missionaries, destroying churches in Kyoto and Osaka, and urging the Christian feudal lords to renounce their faith. Ukon, refusing to renounce his faith, was deprived of his rank and his fiefdom was attacked. After the death of Hideyoshi, the Tokugawa family took control of the whole country and established their shogunate government in Edo (present day Tokyo). They continued to pursue a policy of prohibiting Christianity. The shogunate feared the influence of Ukon, and in 1614 exiled him to the Philippines along with more than 300 Christians. On reaching Manila, they were given a national welcome, but before long Ukon fell gravely ill and died in Manila during the night of February 3, 1615, some 40 days after his arrival there. He was given a national funeral and was buried in the Philippines.



UKON'S MESSAGE FOR US TODAY: THE PRINCIPLE OF CHOICE Ukon was often placed in situations where important and decisive life choices had to be made which could not be avoided by a military commander belonging to the powerful ruling class. He stood at the very forefront where the values of God and that of the world come into

greatest conflict. Decisive choices that cannot be avoided have to be made by any Christian leader in whatever age. Ukon held clear principles for choosing the path that would lead to God and would lead to correct decisions. To answer to the love of God who, in order to love without limit and to save we sinners, took on himself mankind's destiny to die this was Ukon's basic principle. That was the only thing he kept in view. This alone was the standard of the major decisionshe made throughout his life. There was no room for compromise. What moved Ukon was the belief that remaining in the love of God was the road to human happiness. Ukon was not mistaken regarding the road to be chosen. It was the road of downward mobility as a disciple of the Lord. In that warring age when everyone strove to climb upward, Ukon chose the path of abasement. Through his choices at each of life's junctures, Ukon became visibly poorer. However, Ukon's heart became richer. The downward path that Ukon took was the way of Christ, the way of the cross. On this downward path one meets God, who is waiting there. Firm hope is found there, because as Christians we know that God lowered himself and chose to become poor for the salvation of mankind. Ukon ascended with Jesus and was received into the presence of the Father. Those who live close to the ground know that God is near. Ukon teaches us that. In the present age, when we are urged to make choices from among various values that promise happiness, people who adhere to Jesus can learn from the life of Ukon to follow the Lord directly, without deviation or error. (Excerpt from CBCJ leaflet released for promoting the canonization)

COME AND SEE EVENTS!!!

February 7, 2017- Beatification of Justo Takayama Ukon 12:00-15:00p.m. Osaka-jo Hall-

February 11, 2017- Diocese Day Asato Catholic Church 14:00pm-50th priestly ordination of His Excellency Bishop Berard T. Oshikawa, OFM Conv.; 60th priestly ordination of Fr. LaSalle; 50th religious profession of Sr. Raphael Masako Higa; 50th wedding anniversary of several couples.

March 5, 2017 - Sto. Nino Celebration at 10:00a.m. ; Gushikawa Catholic Church.



なぜ、平日のミサに 与るのでしょうか

ヨセフ・ブイ神父
名護教会 主任司祭



パチカンの典礼の教え「SACROSANCTUM CONCILIUM」で、毎回のミサの中でイエス様は、次の五つの中に現存されることを示しています。

それは、「祭壇」「福音朗読のとき」「イエス様の御体と御血」「司祭の姿」「共同体が二人、三人以上集まるところ」です。

それは、「祭壇」「福音朗読のとき」「イエス様の御体と御血」「司祭の姿」「共同体が二人、三人以上集まるところ」です。

ミサは、教会の中で信仰生活をおくるために一番大切なものです。さらに、霊的生活を高めるために最も必要かつ価値あるもので、キリスト信者の信仰の中心になっています。

司祭の保護者である聖ヨハネ・マリア・ヴィアンネは「私たちのすべてのよい働きは、ミサの犠牲とは比較になりません。なぜなら、私たちのよい働きは人間のものです。ミサは神様のものです」と言っています。さらに「ミサを捧げるとき、神様は私たちにたくさんの恵みを与えてくださいます」とも言いました。

毎回のミサに神様は現れていま

す。それなのに、平日のミサに参加する人は少ないです。どうしてでしょうか。イエス様に会いに来たくありませんか？

平日のミサの効果について、三点から考えてみます。

一、自分自身の霊的な高まり

私たちは、体の健康を保つために毎日ごはんを食べますが、自分の魂の健康のためには、毎日ミサ

に与って、イエス様の心と体をいただくことが必要です。ミサに与って、ご聖体をいただき、私たちはイエス様になるのです。そして社会や家族の中で、イエス様として分かち合っていきます。

平日のミサは、人数が少ないことが多いでしょう。だからこそ、主と私の個人的な親密な交わりを感じることもできます。私たちは、日曜日に教会に行けないこともありますが、ある意味でとても孤独に感じることがあります。しかし、平日のミサで個人的な神との親密さに結ばれるならば、孤独は癒され、恵みによって支えられるでしょう。社会で信仰者として生きていく喜びと勇気をいただけるでしょう。

また平日のミサは、死者のため（命日など）、また、困難にある人のため、病気の快復、誕生記念日、洗礼記念日、霊名の聖人の祝日、結婚記念日のお祝いなどの意向でミサを捧げ、とても静かに祈ることができます。ミサに与り、捧げることによって、神様は、毎日罪を犯す私たちを清め、聖化してくださいます。

二、教会共同体としての霊的な高まり

平日のミサに与る人が多くなればなるほど、教会共同体としても

霊的に強く、高くなってゆくと思っています。教会を生かすものは「ミサ」です。毎日ミサを捧げることが、教会を生かす神様からの贈り物です。またミサにみんなが集まり、大きな声で真剣に与ることは、教会共同体の一致の現れです。そこには、平和、喜びがあり、神様の完全な国が実現しているのです。

三、未来の子供たちのため

子供たちの将来を両親は心配しますが、両親はまず子供たちに模範を示さなければなりません。私たち信徒は子供や孫に対して大きな責任があります。親は子供たちの日常生活を守る責任があります。子供たちの信仰を守り、育てていく責任は果たしているのでしょうか？子供たちは親をまねします。毎日親と一緒にミサに行くようになれば、その子は大人になってもからもミサに行くようになりま

暑くても寒くてもどんなときでもミサにあずかり続けました。台風や病気で、たまに行けない日があると、一日中、心に何か足りない気持ちがあつとありました。ミサを習慣にしてくれた両親に感謝しています。

終わりに

主日のミサはもちろん大切ですが、それに比べて平日のミサは、日曜日ほど大切ではないという考えがあるようです。日本の教会では、平日のミサに参加する人は多くありませんが、参加している信徒たちは、教会をあたたく守り、生かし、教会の発展のためにいると思つています。少ないですが、大切な人々です。ミサのあとも、この方たちと教会のためのいろいろな話を直接しています。

平日のミサを愛してください。自分の信仰のため、家族や子供たちのため、教会のため、毎日のミサを大切に思う心をもってほしいのです。平日のミサは三〇分くらいですが、すばらしい時間です。皆さん、主が与えてくださる時間を見つけて、ぜひ、平日のミサに与りましょう。

そして、平日のミサにもなかなか参加できない事情のある皆さんには、ぜひ、時折、聖体訪問をされることをお勧めします。

二年前の一月に私は、娘を病気で亡くしました。娘は、明日からの入院を控え自宅で、司祭の手で聖体と病者の秘跡を受け、感謝の中で夕食を共にし、ふだんと何ら変わらない様子で床に就きました。

入院二日目の病状の急変は、だれにも予測できないことで、主治医も驚き、首をかしげていました。娘は、病気を発症してからは、どんなときにも、笑顔をやさず、前向きに生きること、手術に耐え、術後の苦しい放射線治療を受けていました。何よりも娘は、明るく振る舞っていました。希望にもあふれ仕事と家族との旅行を楽しんでいました。

健気なその姿に「できるものなら変わってやりたい」という親なら誰でも思う気持ちになりましたが、それを抑えて、娘のために「にんじんがいいよ」と聞けば、生ジュースを絞り、プロポリス、ノニ果汁なども体によいものを求めて奔走し、親として出来る限りのことをしました。

わたしは、十六歳・高校一年生のときに「信仰は命がけ」とも知らず、同級生八名と開南教会でフェリックス・レイ神父（後に司教）から洗礼を受けました。

その頃の沖繩は、戦後の混乱期で、教育勅語の教科書には黒い線が引かれ、思想や信じていたものが、根源から否

定され、新たな価値観がうまれました。アメリカ世の名の通り、文化やさまざまな宗教が入る激動の時代でした。

カトリック教会も、カプチン会の外国人司祭によって再建され、戦争で痛手を負った沖繩の人々への支援活動とキリストの教えを広める福音宣教を行っていました。

両親は、カトリック信者ではありませんでしたが、わたしに続いて母が六〇歳のころ洗礼を受けました。

日曜日に教会に通い、家に帰ると、

たて軸よこ軸

二月は恵みの月
神の喜びの人生を生きる

開南教会 伊田 初枝

待つ父に「今日の話はこうだった」と話すのが母の習慣になりました。聖書のみことばや神父の説教の内容を父に《うちなーぐち》で伝えていました。「うんうん」と母の話に嫌がりもせず、うなづく父の姿を今も思い出します。

そんな父も、八十六歳に大城清正神父から洗礼を受けることができ、キリストの家族になりました。母のたゆまない福音宣教が、実を結んだ瞬間だったと思います。

母が、カジマヤー（九十七歳）を迎えた時には、親戚を呼んで共に感謝の

ミサを捧げ、近くのホテルで祝宴を行うことが出来たことが良き思い出になりました。

私は、洗礼を受けてから、これまでの人生で結婚、出産、子育てを神と共に歩んできました。三人の子どもは、幼児洗礼を受け、今までの人生を神の恵みの中ですくすくと育ちました。

息子は、県外で就職していましたが、二〇〇一年、交通事故に遭い重傷、そのケガで長い入院生活を余儀なくされました。その際には、息子の傍に付き添い、夫婦で病院の長いすで寝泊まりするという生活をしました。

四年の間、朝起きてから寝るまで、息子のことだけでなく、すべての事を無我夢中で祈りました。神にすがり祈ることは、疲れを癒し、不安を取り除き、心の支えと生きる力になりました。家族と教

会の多くの姉妹兄弟にも祈っていたできました。祈りがすべてで、祈りなくしては、この困難を乗り越えることができませぬ。

息子の病状が落ち着き、沖繩に帰ってから、夫は、洗礼を受けることになりました。夫の受洗は、神からの贈り物で、家族が一つに結ばれたしるしになりました。その後、姉も受洗の恵みをいただき、義兄も受洗の恵みを受け帰天しました。

わたしの体験を通して、言えることは、苦しいことも、楽しいこともすべてを神にささげること、神に祈ること、神に委ねること、それら乗り越えられる、という確信です。

「すべては、神に造られた」「アーメン」をこころに留めて、これからの信仰生活すべてを喜びにかえて送りたいと思います。

すべてを奉獻する祈り

御父よ、わたしは固く信じます。

あなたが、わたしの歩む道を整えてくださることを。

わたしの人生を導いてくださることを。

わたしとともに歩んでくださっていることを。

これ以上何を心配しなければならぬでしょうか。

信仰とは恵み。あなたのみ旨のままに、すべてをあなたのみ手にゆだねます。

わたしはあなたの子。

「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」(フィリピ 四・13)

二月二日は、幼子イエスが捧げられた「主の奉獻の祝日」で、恵みの月です。娘の三年忌を無事終えてこの手記が記載されるころ、私は、スペインのサグラダ・ファミリア教会や聖テレジア修道院に行く聖地巡礼に出かけています。神からいただいたこれまでの感謝と祈りの旅が送れますように。

教区 NEWS 教会

押川司教の公式訪問

当教会では年に一度の司教の公式訪問を聖家族の祝日に行っているが、今年は正月と重なったため、一月十五日になった。

ミサの説教で司教様は家庭における信仰生活のありようを話された。十人兄弟姉妹の大家族であるにもかかわらず朝の祈り、夕の祈り、食前食後の祈りを家族揃って唱えたご自身の幼少時代の事を話され、現在は家族で祈るといふ信者家庭が激減しているという問題提起をなさった。ウ



ゴザ教会

の教育もしっかりなされているとい

うお褒めの言葉もいただいた。

君、与那嶺浩二君、新垣千尋さん、比嘉舞花さんたちは、日頃侍者として奉仕している中学生である。共同祈願の中で「信仰を強く持ち、教会の一員としてこれからがんばる」と宣言した四人がとても頼もしく思えた。今年新成人になった屋宜秀高君の祝福も行われた。ミサ後はエレミアホールで昼食会。女性の会有志の持ち寄った料理やファミリィ会の焼き肉を頂き、宴も盛り上がった。

押川司教には今年叙階五十周年になるということで、蘭の花やワイン等の祝いの品々が贈られた。

司教になってこの二十年間、ベトナムやフィリピンから神父を沖縄に招いて下さったり、沖縄の不平等な扱い、基地問題を全国に広くアピールしたりで積極的な活動をしてこられた。また身近なところから話して下さるその語り口はともわかりやすく、親近感を覚える。ミサ後、司教の祝福を受ける長蛇の列がそれを物語っている。

宴の終わりには、司教様が手踊りをしながら「島のブルース」を歌われ、それに合わせて新垣和子さん振り付

チアタイする説教であった。また、ゴザ教会は典礼がきちんとされていて、侍者の教育もしっかりとされているとい

うお褒めの言葉もいただいた。君、与那嶺浩二君、新垣千尋さん、比嘉舞花さんたちは、日頃侍者として奉仕している中学生である。共同祈願の中で「信仰を強く持ち、教会の一員としてこれからがんばる」と宣言した四人がとても頼もしく思えた。今年新成人になった屋宜秀高君の祝福も行われた。ミサ後はエレミアホールで昼食会。女性の会有志の持ち寄った料理やファミリィ会の焼き肉を頂き、宴も盛り上がった。

馬小屋巡りニュース

首里教会

①馬小屋巡りを喜び楽しみにしよう(子ども会)

一月四日、教会学校の子供達と馬小屋巡りをしました。僕の中では毎年恒例の行事です。お天気も良く穏やかなお正月の一日でした。



安里教会で・・・

朝九時半に集合してマイケル神父様のお話を聞き出発しました。与那原教会、フィアット修道院、安里教会、



Sr.川口訓子を偲ぶ

マリアの宣教師フランシスコ修道会熊本修道院のシスター川口訓子が、1月1日に帰天されました。(那覇教区では伊江島に同会の修道院があります)。

シスター川口に初めて出会ったのは、安里にその修道院があった頃で、私は小神学校へ通っていました。いつもニコニコと笑顔で迎えてくださいました。伊江島での活動を最後に沖縄を離れる際、教区報の送付を頼まれ、最初は神奈川県に、次いで熊本県の修道院宛に教区報を送り続けました。

昨年、熊本にボランティアとして3ヶ月余滞在する機会を得、事務局で一緒になったシスターがシスター川口と同じ修道院所属であったので、休みで帰られる際に連れもらい、シスター川口とも再会を果たすことができました。道順がわかったので、その後も2回、個人的に訪れて話をさせていただきましたが、記憶ははっきりしており、24年を過ごした沖縄が「私にとっては故郷そのもの」と話されていました。シスターの長年に渡る沖縄でのご奉仕に感謝すると共に、神さまが永遠の安息をもってシスターに報いてくださるようお祈りしたいと思います。

今月号には昨年、初の沖縄出身者として女子パウロ会で活躍されたシスター花城の訃報も掲載されています。私たちが直接関わることはなくとも私たちは多くの恩人、友人に助けられてあることを日々感謝して歩みたいものです。(首里教会 新田選)



Sr.花城京子 帰天

(普天間教会出身)

聖パウロ女子修道会(女子パウロ会)

那覇教区普天間小教区出身のSr.ドメニカ花城京子が12月1日に天に召された。66歳。

普天間小教区では、若者たちのリーダー的存在で、そのころ盛んだった教区青年会でも活動していた。女子パウロ会のホームページ「Laudate」によると1975年沖縄国際海洋博覧会が開催された際、パチカン市国の展示ブースでシスターたちと一緒に生活をしながらお手伝いをしておられた。半年の会期中シスターたちと関わる中で、その生活態度に心を惹かれ、修道生活に目を向けさせるきっかけとなった。海洋博終了3日後に上京。翌年に入会。1980年に初誓願、1985年終生誓願。

その後は書籍販売や訪問宣教、視聴覚制作等、様々な使徒職を果たしておられた。2009年に病を得、後に施設に入所したが、病状が進み、その生涯を天の御父に返した。(泡瀬教会 山田圭吾)

開南教会、小祿教会、そして隣の修道院に行きました。馬小屋の前では神父様のギターと僕のヴァイオリン演奏で聖歌を歌い、祈りを捧げました

与那原と開南は一目でわかるダイナミックな馬小屋、安里は一人一人が大きくてお顔がよくわかるイエス様、フィアットと小祿の修道院は小さくて可愛らしい馬小屋、小祿は一つ一つの像はものすごく小さいけれど、その場の情景がよく分かる不思議な空間でした。

毎年、それぞれの教会の馬小屋の違いに感心します。

それぞれの教会の神父様、シスターたちに会ってお話したり、お菓子や飲み物も出してくださったり、とてものおんびりとした楽しい時間でした。途中のフィアット修道院では去年と同じように、昼食をとらせていただきました。シスターたちの作ったきれいな色のゼリーや巨大なプリンが面白かったです。不思議な飲み物も衝撃的でした。

用意してくださった教会の皆さま、ありがとうございます。また来年も楽しみにしています。

(岡部修)

②女性の会 馬小屋巡り

去る一月七日(土)に女性の会が企画した馬小屋巡りをしま



コザ教会で・・・

した。総勢四〇名の信徒が中型バス二台に乗り込み、名護教会を皮切りに石川教会↓コザ教会↓具志川教会↓泡瀬教会↓与那原教会↓フィアット修道院↓首里教会まで、主任司祭マイケル神父と共に祈り、クリスマススの歌を歌いながら楽しくめぐり過ぎました。

訪問したすべての教会で幼子イエスは両手を広げ微笑んで私たちを迎えてくださり、だきしめてくださいました。平和でなんとでもない穏やかなひとときを過ごすことが出来ました。また名護、コザ、具志川教会、

フィアット修道院ではお茶やお菓子などで、神父様、信徒、シスターの皆様に暖かく迎えていただき、感謝でいっぱいです。これからも毎日の日々の生活に主イエスを迎えて信仰を深めることができますように。

(比嘉須賀子)

司祭になって十年です

泡瀬教会

当教会の主任司祭ボスコ・ティン神父様が、司祭叙階十年を迎えました。小さくはあるが、一つの節目です。神父様のご希望もあつて、この十年の記念日を祝うことになりました。ボスコ神父様は、次のように話されました。

「私は司祭叙階十年の記念日を迎えます。この日を記念して、司祭方、助祭方、修道者たち、そして、親愛なる信徒の皆さんとともに、感謝のミサを捧げたいと思います。どうぞ皆さんご参加くださるようお願いいたします。」

感謝ミサは次のように行われます。

・日時 二月二十六日

午後三時〜午後七時

・場所 カトリック泡瀬教会

・主司式 押川壽夫司教様

皆さんのお出でをお待ちしております。

信徒一同

召命黙想会のご案内

日時：3月18日(土)13:30
~20日(月・祝)11:30

場所：聖ドミニコ宣教修道女会
沖縄修道院(真栄原)

テーマ：来てみなさい ~平和を築くために~

対象：高校生~35歳(未婚の方)
カトリック信者

参加費：高校生1,000円 高校生以外2,000円

①申込み締め切り：2月末

②申込み・お問合せ：沖縄修道院(真栄原)
シスター寺尾

TEL 098-897-3394 FAX 098-898-6003

(お近くの聖ドミニコ宣教修道女会でも受け付けます。)

那覇教区平和委員会

日時：2月26日(日)
午後2時~4時

2月例会

場所：安里教会

第1部 ドキュメンタリーフィルム上映

「テロリストは僕だった」琉球朝日放送

第2部 講演会

テーマ：「沖縄基地建設反対に
立ち上がった元米兵たち」

講師：ダグラス・スミス氏

・沖縄キリスト教学院大学客員教授
・VFPC(平和を求める元軍人会)沖縄支部長

問い合わせ

平和委員会 ☎090-3339-6474(谷)

サントニーニョ・フェスティバルへのご案内

場 所：カトリック具志川教会
 日 時：3月5日(日) 午前10時
 ミ サ：司式：押川壽夫司教
 ミサ後サントニーニョの行列

食 事：食事券を発行します。当祭りから得られる
 資金は当教会の修繕に使われます。
 主任司祭 ピーターチャネル・チェ
 信徒代表 高江洲政子

四旬節黙想会へのお誘い

日 時：3月8日(水)
 午前10時～午後2時 (弁当持参)

場 所：普天間教会
 指導者：ペトロ神父 (カプチン会)

連絡先：屋宜留美子 (石川教会) ☎090-6857-7321
 比嘉須賀子 (首里教会) ☎070-5813-2557

サマーキャンプ 50 周年記念事業 黙想の家大改修工事への協力お願い (訂正とお詫び……編集部)

主の平和と喜び

サマーキャンプ 50周年にあたって、黙想の家の大改修が計画されました。このことについて、押川司教様は本紙 1 月号でサマーキャンプの意義を説き、さらに、老朽化した黙想の家の大改修を行うことにした経過を説明し、皆様のご協力をお願いされております。

すでに、各小教区では協力の募金活動を行っていると思いますが、募金の「振込口座」の番号がこちらの不注意で間違っておりました。お詫びして下記のとおり訂正します。

もう一度 1 月号をお読みになり「小教区において本事業についての理解を深めましょう。」そして、今年の教区目標「黙想の家・若者たちを教会の宝に」を心に留め、祈りと協力をお願いいたします。

特別献金振込口座：沖縄銀行大道支店 (121) 普通預金 1918013
 宗教法人カトリック沖縄教区 代表役員 押川壽夫



葬祭の
 「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。お気軽にご相談ください。

那覇市首里烏堀町4-57-3
 TEL & FAX: 098-885-8205
<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>
 E-mail: yasurai@nirai.ne.jp

代表者・新田 選

24時間
 受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
 そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数年……。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
 (実務担当) 比嘉 高茂

24時間
 受付

てんごく
 ☎098-853-1059

